

『都筑く都筑の神歌』

作詞・作曲 長谷川武雄（つづき謡曲会代表）

のたまわ
して曰く。

シテ 杉と櫛樟、この両樹は、以て浮き寶と為すべし。
くす ふたつのき

ツレ 櫛は以て、瑞宮を為る材と為すべし。
みずのみや つく き

シテ 披は以て、顕見 蒼生 の奥津 棄戸に將臥さ
うつしき あおひとくさ すたへ もちふ

シテ む具に為すべし。
んそなえ

地謡 夫の噉ふべき八十木種も、皆能く播し生うべし。
そ くらオ やそこだね ほじこ

尊は木種を持ち帰り、此は吾が・私に用ふべから
ずと、高天原に奉る。

地謡 ときに素戔鳴尊の御子にて、御名をば、五十猛命
いたけるのみこと

と申ししが、多に樹種を持ち降りて、筑紫より
さわ こだね

始め、大八洲の国々に播き殖して歩しが、武蔵
ま おお

の国 都筑の郡に立ち至り、
うま みずがき

シテ こはいかに、美し国ぞと打ち眺め、瑞垣の久し
みやこきす たつみ

き 都筑くべし。都を築く辰巳には、浮き寶の入
り集う、良き泊まりとぞなりぬらむ、横の浜があ
るぞよと。

地謡 吾は此の後都筑をば、永久の宮居と定めけむ。都
たみくさ

筑に住める民衆に、幸い授くる請願を、立てて
ノ

宮居を始むべし。
たみくさ

シテ 吾と民との契りにて、
都筑の国の民衆や、山川草木に至るまで、恵みを
授け賜はらむ。

シテ これぞ千秋楽の舞い。
ばんせい

地謡 千秋萬歳の世々までも、
シテ 吾は杉山の社に宮居して、天下泰平、国土安穩を
まんざいらく

守り給はらむ。喜の舞いなれば・一舞舞はう萬歳樂。
地謡 萬歳樂、

シテ 萬歳樂、
地謡 萬歳樂。

(詞章)

シテ ころり ころり ころり ころり ころり ころり ころり
おのころり。

ツレ 天地の分れしとき、伊耶那岐・伊耶那美
あめつち いざなぎ いざなみ

ふたはしらのかみ みと まぐわい おおやしま
一一 神、共為の夫婦し給ひて、大八洲の国
を生み給ふ。

地謡 次に日の神 月の神を生み給ひて、最後に素戔鳴
いやはて すさのおの

神を生みましき。
かみ

ツレ 素戔鳴尊、無状なき為行なし給ひ、天照 大神
あじき しわざ あまてらすおおんがみ

の御怒りに触れられ給ひて、高天原を退り出で、
たかまがはら まか

韓国の曾戸茂梨に降り給ふ。
からくに そしもり

地謡 ここで 尊 思うよう、韓国には、金 銀あり。
みこと オ こがねしろがね

我等が豊葦原の国には、浮き寶これ無く、寶に
とよあしわら

恵まれぬは良からじと 曰ひて、乃ち鬚髯を抜き
のたま ひげ

放つ。

シテ 即ち是れ杉の木と成り、
地謡 胸の毛を抜き放てば、

シテ 即ち是れ櫛と成り、
地謡 尻の毛は、
かくれ

ツレ 是れ即ち披の木と成り、
地謡 眉の毛は、
まげ

シテ 是れ即ち櫛樟の木と成る。
くす

地謡 尊すでにして其の用ふべき処を定む。乃ち 稱
ことあげ